

第四次・報告書 目次

報告書発行にあたって／団長 鈴木 孝雄 2p
無差別戦略爆撃の地、重慶を訪ねて／田中 秀樹 3p
細菌兵器が使用された義烏を訪ねて／鈴木 孝雄 7p
南京大虐殺記念館及び惨案跡を視察して／有田 純也 10p

資料

- 村山内閣総理大臣談話 2p
- 旅の実施概要 13p

資料

村山内閣総理大臣談話

「戦後 50 周年の終戦記念日にあたって」（いわゆる村山談話）

（平成 7 年 8 月 15 日）

先の大戦が終わりを告げてから、50 年の歳月が流れました。今、あらためて、あの戦争によって犠牲となられた内外の多くの人々に思いを馳せるとき、万感胸に迫るものがあります。

敗戦後、日本は、あの焼け野原から、幾多の困難を乗り越えて、今日の平和と繁栄を築いてまいりました。このことは私たちの誇りであり、そのために注がれた国民の皆様 1 人 1 人の英知とたゆみない努力に、私は心から敬意の念を表わすものであります。ここに至るまで、米国をはじめ、世界の国々から寄せられた支援と協力に対し、あらためて深甚な謝意を表明いたします。また、アジア太平洋近隣諸国、米国、さらには欧州諸国との間に今日のような友好関係を築き上げるに至ったことを、心から喜びたいと思います。

平和で豊かな日本となった今日、私たちはややもすればこの平和の尊さ、有難さを忘れがちになります。私たちは過去のあやまちを 2 度と繰り返すことのないよう、戦争の悲惨さを若い世代に語り伝えていかなければなりません。とくに近隣諸国の人々と手を携えて、アジア太平洋地域ひいては世界の平和を確かなものとしていくためには、なによりも、これらの諸国との間に深い理解と信頼にもとづいた関係を培っていくことが不可欠と考えます。政府は、この考えにもとづき、特に近現代における日本と近隣アジア諸国との関係にかかわる歴史研究を支援し、各国との交流の飛躍的な拡大をはかるために、この 2 つを柱とした平和友好交流事業を展開しておりま

す。また、現在取り組んでいる戦後処理問題についても、わが国とこれらの国々との信頼関係を一層強化するため、私は、ひき続き誠実に対応してまいります。

いま、戦後 50 周年の節目に当たり、われわれが銘記すべきことは、来し方を訪ねて歴史の教訓に学び、未来を望んで、人類社会の平和と繁栄への道を誤らないことでもあります。

わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に誤り無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。

敗戦の日から 50 周年を迎えた今日、わが国は、深い反省に立ち、独善的なナショナリズムを排し、責任ある国際社会の一員として国際協調を促進し、それを通じて、平和の理念と民主主義とを押し広めていかなければなりません。同時に、わが国は、唯一の被爆国としての体験を踏まえて、核兵器の究極の廃絶を目指し、核不拡散体制の強化など、国際的な軍縮を積極的に推進していくことが肝要であります。これこそ、過去に対するつぐないとなり、犠牲となられた方々の御霊を鎮めるゆえんとなると、私は信じております。

「杖るは信に如くは莫し」と申します。この記念すべき時に当たり、信義を施政の根幹とすることを内外に表明し、私の誓いの言葉といたします。

（出典 外務省ホームページより）



重慶抗戦遺跡博物館外観

第4次「村山談話を継承する平和の旅」
報告書発行にあたって

戦争の加害の歴史を知る

団長 鈴木 孝雄

し、韓国で元慰安婦に直接謝罪せよ。

戦争の加害の歴史を知る

2014年に社民党の吉田党首が訪中して交流を深めたことを契機に、社民党と国際友好文化センター(IFCC)の共催で翌年から実施され、今年で4回目を迎えた。「2018年 第4次・村山談話を継承する平和の旅」は、5名の参加で5月9日から14日まで重慶、義烏(ぎう)、南京を訪ねた。重慶は戦略爆撃を行った地として、義烏は731部隊が細菌戦を展開し多くの犠牲者を生んだ地であり、南京は「大虐殺」が行われた地として知られている。いずれも消し去ることのできない「戦争の加害の歴史の地」である。しかも、重慶爆撃は、米国は当時日本を無差別爆撃であり国際法に違反している、と非難しながらその後の東京大空襲、ヒロシマ、ナガサキの原爆投下を戦争犯罪と批判されるのを恐れ、東京裁判の訴因に含まれておらず、731部隊による細菌戦も犯罪行為として裁かれなかった、隠蔽された戦争犯罪である。

短い時間であったが、こころの重い旅だった。だが、幸いなことに我々の旅の名称には「村山談話を継承する」とあり、被害者の皆さんとところを通わすことができたと思う。

ヒロシマといえば南京大虐殺

——ヒロシマというとき、ああヒロシマとやさしくこたえてくれるだろうか ヒロシマといえばパールハーバー ヒロシマといえば南京大虐殺……ああヒロシマとやさしくはかえってこないアジアの国々の死者たちや無告の民がいつせいに犯されたものの怒りを噴き出すのだ…捨てた筈の武器をほんとうに捨てねばならない 異国の基地を撤去せねばならない…やさしいこたえがかえって来るためには わたしたちの汚れた手をきよめねばならない—— (栗原貞子「ヒロシマというとき」より一部略)

安倍政権は憲法を変えようとしている。言い尽くせないほどの悲惨な戦争を経て誕生し、人類の崇高な理念を謳う歴史的な平和憲法を変えようとしている。しかもその言い草が「みっともない憲法ですよ」と言い切る安倍首相によって、こんなことが許されるのか。「死者たちや無告の民がいつせいに犯されたものの怒りを噴き出す」に違いない。絶対に許すことができない。安倍首相は南京大虐殺記念館で献花

謝罪なくして友好なし、友好なくして連帯なし
平和の旅を終えて、私はまだまだ加害の歴史を知らない、ということを知った。中国のいたる所に日本の侵略の歴史がある。そして日本政府は心からの謝罪をしていない。私たちがそれを許しているのだ。今もって村山談話が評価されるとは、その後の日本政府の態度が全く逆の姿勢を示しているからに他ならない。中国、朝鮮をはじめ、東アジアの侵略の実態をもっと知れば、私たちが憲法9条を護ろうとする意志はさらに強固なものとなるだろう。侵略の歴史を知ることによって東アジアの人々と連帯することができ、日本の平和勢力と世界の平和勢力が力を合わせることができる、と思う。

——死者たちよ 安らかに眠らないでください
石棺を破って たちあがり 飽食の惰眠に忘却する 生きている亡者を 激しくゆすって 呼びさませて下さい

一度目は あやまちでも 二度目は裏切りだ
死者たちへの誓いを忘れまい—— (栗原貞子「ヒロシマ消去法」から)

記：2018年7月10日

(静岡県平和・国民運動センター事務局長)



重慶抗戦遺跡博物館レリーフより

— 記憶に残った旅 —

田中 秀樹

< 重慶への道 >

1937年7月、盧溝橋事件が勃発した。翌8月「居留民保護」を名目に第2次上海事件が起きた。日本帝国陸海派遣軍は、中央の指令を無視した独断専行で戦線を拡大して日中全面戦争に突入する。「速戦即決」の戦略が破綻して、戦争は泥沼化していく。また、9月に第2次国共合作宣言が発表され、中国人民は統一して抗日抗戦に向かうことになった。

上海戦線は、蒋介石が投入した中国軍の精鋭部隊を配置して、日中戦争史上最大の激戦となった。上海、南京の陥落という非常事態に直面した国民政府は、1937年11月17日「空間をもって時間にかえる」持久戦の戦略に舵を切り、首都を四川省重慶に移転することを決定した。だが実質的な首都は武漢に置かれていたので、日本軍は単一作戦では最大規模の動員で武漢攻略にあて、1938年10月武漢三鎮が日本軍に占領された。

この間、中国の主要都市に地上軍が占領するための手段として破壊を意図した本格的な無差別爆撃が行われた。日本軍の侵略により大量の難民が生まれた。1,000万人を超える難民が揚子江流域をたどり奥地へ移動した。1936年当時の重慶の人口は約34万人が1939年には70万人に増加して、なお外部からの流入が続いた。

また、国民政府の新たな抗戦の基盤となる奥地工業建設が進められた。四川省を中心に沿海・沿江部の工場移転（60%）のうち3分の1が重慶近郊に移転したといわれている。工場移転に伴う技能労働者の流入。それだけでなく首都機能を維持するために金融・商業施設、文化・教育施設、外国領事館・海外メディアも重慶に移った。多くの難民は、木と竹を組んだ粗末で密集する掘立小屋で生活を始めた。

< 中国民間対日索賠償連合会との交流 >

5月10日、交流に先立ち「三峡博物館」を訪れ3階の重慶無差別爆撃の展示フロアを見学した。パノラマで爆撃機が編隊を組み、断続的に爆弾・焼夷弾を投下して破壊と木と竹の住居は炎に包まれ・延焼する。高射砲で迎え撃つが、射程外の高度を飛行しているため、効果は少ない。なすがままに無差別爆撃の被害を受け続ける実相を視覚で感じることができた。（折しも今年、マルクス生誕200年。博物館の1階ホールで重慶市主催の「マルクス生誕200



年」を記念したパネル展示が開催されていた）

原告の栗遠奎さん（前列中央）を囲んで。後列左から西南大学：楊宇翔先生、原告・姜遠福さん、対日賠償原告団秘書長・侯岩琳さん。2018年5月10日

13～15時まで連合

会の事務所で交流会が持たれた。報告された栗会長は、85歳で中国の民間組織・対日賠償請求を求める会の会長である。この組織は2004年から定期会合を持って、2006年に会を発足して東京地裁に謝罪と賠償請求を提訴した。地裁で敗訴して東京高裁でも昨年12月に爆撃の事実認定はするが、謝罪と賠償請求は却下された。現在、最高裁に申告しているが逆転判決の可能性は少ない。「それでも我々は提訴を続ける。いつか良い方向に行くことを期待している」と述べていた。

「現在、重慶市は49区と県を所轄している。その内32区が爆撃された。それは当時重慶が首都だったから。1938年2月から1944年4月まで6年2ヶ月もの長期間爆撃を受けた。重慶周辺の成都、樂山、自貢なども爆撃された。被害者は10万人を超える。財産損失は計算できないほど莫大である。重慶の典型的な惨事は、1つは1939年5月3・4日の大爆撃。2つは1940年8月19日の爆撃。3つは1941年6月5日の防空トンネルでの惨劇。無防備都市に対する無差別爆撃は国際法違反」と栗会長は重慶無差別爆撃の犯罪性を語った。

・若干の補足

武漢占領をもって戦線が伸びきり補給（補充兵役）が困難となり日本軍の大規模な侵攻は停止した。そこで、1938年12月「大本營の意図は占領地域を確保してその安定を促進し堅実なる長期攻囲体制をもって残存抗日勢力の制圧衰亡に勉める」ことを前提に「航空侵攻作戦に任じ特に敵の戦略及び政略中枢を圧擾乱する」（『大陸命第241号』）と無差別戦略爆撃命令を出した。要約すると①戦略は「占領地の確保・安定」 ②航空作戦の目的は「敵の戦略及び政



1940年8月、爆撃で炎上する重慶市街

略中枢を圧擾乱する」③戦略爆撃の任務は主に中支那派遣軍が担当し、陸海軍の協力で行う④後方戦略爆撃は陸海軍の「独断専行」でなく天皇の裁可を得て実施されたことに着目する必要がある。

今までの地上軍が都市占領の手段として行われた無差別爆撃とは質を異にしている。戦略爆撃の意図は、爆撃で中国政府の抗戦心や中国国民の抗戦意思を動揺させ、投降を迫ることである。そのために、軍事目標だけでなく生産設備・交通機関・民間人住居を徹底的に攻撃し、戦争能力を破壊し政府・国民の戦争継続意思を喪失させることにあった。また、「特殊煙（あか筒、あか弾、みどり筒）を使用することを得」と毒ガス・催涙ガス使用を容認している。「非戦闘員等に対する爆撃禁止」「毒ガス等の禁止」の二つの国際法に違反した。（毒ガスを使用した形跡はない）

1) 「100号作戦」(1939年)

1938年12月25日、1月7、10、15日と4次の爆撃が行われたが、重慶は秋から春先にかけては霧季で、天然の防空システムに覆われ大した被害はなかったようだ。

* 「5・3、5・4爆撃」

5月3日、4波36機で166発の爆弾・焼夷弾を投下した。死亡673人、負傷者350人の犠牲と建物損壊1086棟の被害が出た。この当時は防空設備・意識など無防備であったため大きな被害となった。

翌4日には3波27機による夜間爆撃が行われ、焼夷弾による火災で重慶は炎上した。死者3318人、負傷者1937人、建物損壊3803棟（『四川各地空襲損害統計表』による）。公式には両日で、死者5400人、負傷者3100人とされているが正確な人数は分からない。

『重慶抗戦記事』によると1939年空襲は34次865機、投弾数1897発、死者5247人、負傷者4196人、家屋損壊4757棟で霧季を迎える10月7日で爆撃を中断している。

2) 「101号作戦」(1940年)

「陸海軍航空部隊は…攻撃目標を重慶市街及びその周辺に指向し、兵力及び天候の許す限り攻撃を持続す…陸海軍は6月中旬以降月明利用期間は極力昼

夜にわたる連続攻撃を実施する」（現地陸海軍協定）

5月28日から始まり8月23日まで32回の昼夜長期連続爆撃を行った。6月16、17日に続き、24日から29日まで連続6日間の市街爆撃をした。また、市街地を区分して地域別に徹底した連続ジュウダン爆撃で街を破壊した。空襲80次、4722機、投弾数10587発、死亡4147人、負傷者5411人、家屋損壊6952棟。死者・負傷者が前年より爆撃規模が拡大したのに少なかったのは、対空防衛設備・意識が整備・高まった結果である。

* 「宜昌作戦」

1940年5月から7月にかけて中国軍の主力撃滅を目的に揚子江上流の宜昌に進攻して街を破壊して撤退を予定していた。爆撃機の出動回数が増えて撃墜・機体損傷と搭乗員の戦死拡大を憂慮した海軍からの中継基地建設の強い要望で宜昌確保の作戦に変更した。厳しい行軍に耐えられず、歩兵第216連隊では38名の自殺者（手榴弾での自爆）が出た。漢口から飛行距離780Kmから480Kmに短縮。8月19日、護衛機として零戦が実戦配備され制空権を確保、重慶は日本軍の自由勝手な爆撃を受け続ける。

3) 「102号作戦」(1941年)

5月3日から8月31日まで新鋭機の大部隊を投入して重慶及び成都を中心に四川省各都市に航空爆撃攻撃を行った。陸攻2050機、艦攻・艦爆201機、艦戦99機、陸偵39機 計2389機。攻撃回数20回（内重慶14回）、消耗爆弾15036。「疲労爆撃」といわれているように連続的に爆撃を行い、防空隧道から出られない状態が続いた。

日米関係悪化のため主力部隊は原隊に戻った。1944年まで爆撃は続くが「重慶戦略無差別爆撃」は1939年から1941年までのおよそ3年間であつたと私は理解している。しかし、3年という長期間にわたって一つの都市に執拗な爆撃を繰り返した事例は他にない。

4) 6月5日「較場口隧道」の惨劇

栗会長「生存者として当時の状況を説明する。私の家はこの建物の下で1940年8月19日の爆撃で損壊して財産を失った。41年6月5日空襲警報を聞いて近くの防空隧道に家族8人で入った。次々に人が入ってきて奥にいと息苦しくなって、空気を吸おうと出入り口に向かうが、防空壕に入ろうとする人

当時の遺体集積地を慰霊のため訪ねたがたどり着けなかった。黒石子鎮から長江沿いの“万人坑”跡を望む。2018/5/10



2018/05/10 17:57

の流れに押し返され混乱状態になった。家族は別れ別れになった。私は当時7歳で幼く・小さかったのでトンネルの隙間に身を横たえて寝てしまい酸欠で失神した。周りの死んだ人が運ばれている時、意識が戻った。多くの死体が運ばれていた。足がマヒして這って外へ移動を始めた。トンネルの近くの家に帰るとお母さんが泣いていた。家族の誰かが死んだと分かった。お父さんは足を負傷して、ベッドに横になっていた。2人のお姉さんが帰宅していなかった。2日間探したが見つけることが出来なかった。暑くて死体が腐敗するので、朝天門に運びそこから船で郊外に運んで大きな穴を掘り、死体を入れ石灰で埋めた(万人抗)。2人のお姉さんへの想いは強い。勉強など色々面倒を見てもらった。日本に提訴するのもお姉さんのため。日本政府は歴史を認め、被害者に謝罪して欲しい。私以外の原告は沢山いる。人生が変わった人も大勢いる」と熱く語ってくれた。

*対空防衛設備の整備を急いだ。1940年には、1865カ所、445,000人を収容できる防空隧道(防空トンネル)が完成した。栗会長が語った防空隧道は事務所の裏側にある。訪ねたが入口は閉鎖されていてトンネル内に入ることが出来なかった。プレートには2,000人以上が亡くなったと記してあった。この隧道は最大定数6,555人に倍以上の人が避難したといわれている。また通風機の故障が窒息死の原因であるとされているが、無差別爆撃がなければ隧道の惨劇を生むことはなかった。原因と結果を取り違えてはならない。

栗会長が語った万人抗を訪れることにした。嘉陵江をさかのぼった黒石子村にあるのだが運転手・通訳・ガイドさんが手分けして住民に聞いてみたが所在地を確定することはできなかった。地形的に判断すると船着き場の周辺地に埋葬したのではなく遺棄された可能性が高い。

<楊先生の話と質疑>

私は、2016年に博士号を取り西南大学に勤めている。元々は日本史を勉強していて日本にも留学した。西南大学に勤め重慶爆撃のことを初めて知った。大学での一番の専門家は潘洵先生で、先生は80年代から重慶爆撃を研究した日本の有名なジャーナリストの前田哲男さんとも連絡を取っている。潘先生は重慶爆撃を研究して2013年出版された本を再構成して2016年『重慶爆撃の研究』(岩波書店)を発売した。その中に死傷者の数・財産損失金額の資料が入っている。潘先生は専門家で、私は研究に参加した。重慶大爆撃には、確かな証拠がある。亡くなった人の名前と年齢、住んでいる地域、負傷の状況などの資料が残っている。去年2月に日本テレビがドキュメンタリーの取材に来た。三峡博物館、遺跡を取材して、日本からの戦闘証拠と重慶の資料を照合して

爆撃の事実を明らかにした。昨年5月23日に放送され、反響も大きかった。西南大学で潘先生の下、ゼミ・授業で大爆撃・重慶区域の日中戦争の歴史教育を若い人に伝えたい。正式な授業や研究センターもある。大学は重慶大爆撃の研究者が集まっている。

●重慶大爆撃の日本での裁判を含めた事件化、問題化、中国の人が声をあげる出発が比較的遅かったのはなぜか。

○1998年の以前、重慶は四川省の一部。省内の爆撃された人が連合会で、対日賠償を求める意識がなかった。栗さんから聞いてもらった方が良い。

○重慶は中国の内陸。花崗事件訴訟をニュースで重慶の人が知り行動し始めた。当時重慶は首都で上海やいろんな所から人が集まった。抗日戦争の後、故郷に戻った人は少なくない。資料収集も大変で時間がかかった。2006年に日本で裁判を起した。

●1939年「5・3、5・4爆撃」で5月4日は「五四運動」20年目。日本軍はそれに合わせて爆撃したと考えられるのか。

○偶然だと思う。

●西南大学に日本の留学生はいるか。重慶爆撃について留学生で研究している人はいるか。小中学生の教育は。

○留学生はいるが、研究者はいない。重慶爆撃を研究しているのは、大学の歴史文化学院。重慶人も知らない。潘先生が研究されて以降、知られるようになった。潘先生は重慶大爆撃と南京大虐殺は同様の惨事と。私も重慶に来て大爆撃を知った。多分重慶以外の人で体験者以外は事実を知らない。地方史で勉強しているが深く教えていない。

●三峡博物館に行った。全体の一部の展示。愛国教育基地になっているか。

○愛国教育基地になっている。

●日中関係で反日を抑える傾向はないのか。

○感じていない。愛国教育を受けるが、それは反



日教育でない。意図的に抑えることはない。

●重慶爆撃は天皇の裁可があったと言われたが、天皇の戦争責任をどう感じるか。



2017年12月14日控訴審での不当判決を受け、中国では関係する成都・鞍山・自贡・重慶で判決報告集会が行われた。写真は2018年1月2-3日重慶の様態。

○中国人のほぼ80%以上の人が天皇の戦争責任を感じている。私は戦後日本史の授業で、中国・日本学界の見解、日本民間人の考えを生徒に教え「自分で判断して」と言う。

<重慶戦略爆撃の意味>

1942年4月18日、米空母から飛び立った爆撃機が小石川（現在文京区）、王子（現在北区）、尾久（荒川区）を空襲した。日本で最初の空爆である。尾久空襲は爆撃機2機が爆弾3発と焼夷弾1発を投下して死者10人、負傷者48人と建物全半壊の被害があった。内爆弾1発が現在荒川区立熊の前保育園前に着弾、そこは私が生まれた所で家は全壊した。幸い家族・親族の被害はなかった。1944年以降、東京は106回の空襲を受けている。その中で大きな被害は1945年3月10日下町大空襲（東京大空襲）、4月14日城北大空襲、4月15-16日城南大空襲、5月25日山の手大空襲である。そして、8月6日広島、9日長崎への原爆投下である。これらの無差別爆撃をたどると日本陸海軍の重慶戦略爆撃に行きつく。

前田哲男氏は「1939年春から41年秋まで続いた、中国の抗戦首都・重慶に対する日本航空戦力の侵攻作戦は、『戦略爆撃』という新しい形式を世界戦史に記すことになった。それは戦争の進化における重大な飛躍の瞬間だった…1937年4月、内戦期スペインのゲルニカにおいてその恐るべき性格を明らかにした無差別・大量殺戮の新形式、すなわち航空機と火焰兵器の組み合わせによる空からの侵攻は、日本海軍航空隊による重慶への『戦略爆撃』をもって、組織的、反復的、持続的戦法として確立・定着するにいたる。…やがてその思想は…1945年3月の東京、8月の広島、長崎へと突き進む」（『戦略爆撃の思想』P413～414）と戦争史上の新しい形式の確立と位置付けた。この思想がその後、核抑止力、朝鮮半島でのナパーム弾、ベトナム戦争時の「北爆」「南爆」や新たな対人殺傷兵器の使用、イラン・イラク戦争での対都市ミサイル攻撃の応酬、そして湾岸戦争から最近のシリアへの巡航ミサイル攻撃に引き継がれている。

日本陸海軍が切り開いた「戦略爆撃」は初めから陸上部隊の侵攻を想定しないで航空機による戦時首都・重慶大爆撃として3年以上市民を殺傷し続け、恐怖と不安・苦痛を与え続けてきた。財産被害も莫

大である。この新しい戦争は、陸上軍が近づけない遠距離・人口集中都市を攻撃し、前線と銃後、戦闘員と非戦闘員、軍事施設と民間・文化施設といった戦争の境界線を取り払ったジェノサイド攻撃であった。さらに直接

大量殺戮をしている痛みと自覚が希薄な機械化された殺戮でもあった。

訪問団の東京大空襲、広島・長崎原爆の発言に対して、「中国は侵略された被害者、日本は侵略した加害者」と栗会長の一言が鋭く胸を刺した。歴史とは真実を探求して、謙虚に向き合うことを痛感した。重慶大爆撃を告発することは、過去の戦争責任を追究するだけにとどまらない。現在と未来の戦争を抑制して、平和な社会を求める運動に連動している。従って、重慶大爆撃の真実をしっかりと学ぶ重要性がある。

現在の重慶市は、北京・上海・天津と4つの直轄市の一つである。人口も3,000万人以上に膨れ上がり、面積は北京の2.9倍と広大である。旧市街は、長江と嘉陵江の合流点で古くから内陸部の商業・交易の中心地である。郊外に向かって高層住宅建設が進んでいる。中心街でも商業・金融施設などの建設が盛んである。街は活気に満ち溢れている。廃墟の中から戦後復興したためか、戦争の遺跡は隧道以外にあまり見当たらない。首都移転に伴い恩恵があったとすれば、工業生産の拡大と金融・商業も活性化したことで沿岸部と内陸部の格差が縮まったことだといわれている。それにしても大きな犠牲の代償すぎる。記憶に残った旅であった。

（社民党東京都連合豊島支部協代表）

【参考文献】

- 『戦略爆撃の思想』（前田哲男・著、朝日新聞社）
- 『重慶爆撃の研究』（潘洵・著、岩波書店）



中国最大人口を誇る都市として発展する重慶だが、惨禍の歴史はまだ清算されていない。発展する街並みを背景に。

細菌兵器が使用された義烏を訪ねて

戦争という鏡で、平和の尊さがわかる

鈴木 孝雄



生存者の証言聴取の様相（2018/5/11 於：細菌戦展覧館にて）

義烏を訪ねて

2018年5月11日、中国人権発展基金会／侵華日軍細菌戦被害者救助基金の王鑫岳さんにホテルまで出迎え頂き、浙江省義烏市の「細菌戦展覧館」を訪ねた。細菌兵器を研究した731部隊が、中国東北の黒龍江省哈爾濱にあることは行ったこともあり知っていた。しかし、中国南部で使われたことまでは聞いていても義烏市をはじめ広範囲にわたる被害を出していたことは、ここを訪ねるまで全く知らなかった。そしてこの度、実際にその土地を歩いてみて、その被害の大きさに驚いた。

ペストは、罹患すると皮膚が黒くなることから黒死病と呼ばれ、14世紀の大流行は、世界人口を4億5000万人から3億5000万人にまで減少させた、と言われる病である。731部隊は、これを中国全土に人為的にバラ撒いたのである。

戦争は鏡、平和の尊さを理解する

——遺族会代表の挨拶

——この40年来、日本の皆さんの正義を希求し、細菌戦被害者に尽力して頂いていることに敬意を表します。日本の軍国主義者、侵略戦争は人類史上、例を見ない災害を世界各地にもたらしました。1944



証言頂いた王基旭さん（前列左）、王化涛さん（前列右）を囲んで

年日本軍は中国を屈服させるため浙江省に伝染病の細菌を撒き、ペストなどいろいろな伝染病で大きな災害をもたらしました。この細菌戦で義烏は93の村が感染し、感染者1385人、1323人が死亡しました。一番有名な事件は崇山村（そんさんそん）で、全村人口1260人の内、1942年～1943年までの間に427人が死亡しました。3分の1が死亡したの

です。戦争は鏡です。その鏡で平和の尊さがわかります。戦争は災難をもたらします。各国が平和に生きていくことが人間の正しい道です。中国国家主席の習近平は、人類運命共同体を唱えています。平和を守る信念を持ちましょう。皆様の健康を願っています——

続いて団を代表し、村山談話の一節を紹介してご挨拶を行ったのち、被害者である王化涛さんと王基旭さんからお話を伺った。

毎日10人から11人も死亡、妹も感染した

——王化涛さんの証言

王化涛さんは、1925年生まれで現在94歳。崇山村の議員も務めていました。

——当時17歳で被害を受けました。初日は、誰も何が発生したかわからず、2日したら一つの家で3人死亡し、それから1日で3～4人死亡。そのあとは、毎日10人から11人死亡、みんな夜に死にました。そのとき、日本の衛生チームと思われる人が予防注射に来ました。そのチームは、村民に予防注射を勧めました。白衣を着た人が注射を勧めましたが、自分は断りました。村のちょっと離れたところに山があり、山の上にお寺（林山寺）があり、感染した人はそのお寺の中に集められました。名義的には検査ですが、実際はお腹を切られたりしていました。解剖です。思い出すだけで涙が出てきます。ペストがピークするときネズミが2、3匹死に、それを埋めたが、その後、妹が感染し、妹を寺に送りました。自分も少し症状が出ました。熱が出て、とても怖かったです。山の上のお寺に行ったら食べ物も飲み物もなく怖かった。この病気に感染し、ご飯が食べられず、頭や体が痛く、誰にも言えませんでした。でも、なぜかわからないが、15日経って病気がだんだんよくなりました。17歳くらいで抵抗力があり乗り切ることができたのではないかと思います。その後、

村の中の建物を全て焼くチームが来て、家の中のものを取り出すことも出来ずに、全て焼かれみんな泣きました。家が焼かれたころは大変で、雨でも外で寝ました。1950年朝鮮戦争が勃発し、みんな行くように言われましたが、私は行きませんでした。

これまでさんざん苦勞したから戦争は嫌です。みんなで幸せに過ごしたいと思います。大部分の日本人は平和を愛していると信じています。その人たちは戦争の時の罪をきちんと認めています。皆さんのようなグループが、私たちに謝りに来てくれて感謝しています。平和を熱望する日本の皆さんと共に進みたいと思います——

飛行機が低く飛んで、何かを落とした

——王基旭さんの証言、現在 80 歳

——飛行機が村の近くに来てゆっくり低く飛んでいました。飛行機から何か落しました。近くの比較的健康な人が、ある暑い日、農作業のあと池に水浴びに行き、家に帰って寝たら死んでしまいました。向かいの人は、医者を呼びましたが医者が薬を出しても治らず、先生の方が逆に感染して3、4日後に死亡しました。1ヶ月後にその先生の葬式でたくさんの方が来ました。先生の息子が8人、娘2人がいましたが、娘は村の西と東でそれぞれ商売をしていました。西でも東でも感染が広がりました。この村でピークのときは1日20人死亡、2ヶ月間で400人くらいが亡くなりました。この病気は崇山村の名前を取り、「崇山株」と病名が名付けられたほどです。衛生チームは10人くらいで熱が出たら寺に来ないか誘いに来ます。おばあさんが騙されて寺に行き、おじさんが食事を持っていたら、おばあさんは死体になっていて、内臓が全て抜かれていました。

崇山には上崇山と崇山があり、少し離れています。王基旭さんは上崇山。600人から700人が生き残りました。そのとき日本人の感染者もいました。家は焼くしかありませんでした。500戸の家が無くなり、600、700人が田んぼの近くに家を建て、あるいは40キロの山奥まで逃げるしかありませんでした。村から40キロ、おじさんに連れられ転々と逃げました。そのとき4歳か5歳ころでした。遊んでいるときに日本軍がきたら逃げます。後ろを見て慌てて逃げたので、熱い火の中に足を入れてしまい火傷しました。半年ほど過ぎ、死ぬ人が1人か2人になった頃に帰りました。遠くに逃げたら帰らなかったらと思う。昔、村は今より豊かだったと思います。そのころ朝日が昇ったら田んぼで農作業し、裕福な生活でした。ペストに罹ったら4日と生き残れません。実際は、義烏で感染した村は100を超えていたといわれています。2015年再調査し、1400人確認されました。(この数字は最初の遺族の話しで詳細が出ています)

ここの展示館は20年以上、多くのボランティアスタッフの手で運営されています。政府の支援金はあ



りません。目的は平和です。戦争で経済が大変になりました。3500万人の犠牲、戦争がなかったらもっと経済発展したはずです——

村山談話を生かす

この後、私たちは侵華日軍細菌戦義烏展覽館内部の展示を見学し、多くの方が亡くなった名簿碑の前に折鶴を奉納した。展示されている地図を見ると細菌戦のほか、化学兵器を使った場所が中国全域に広く展開されている。今からでも謝罪し、被害に対する補償をすべきだと強く感じた。これらの償いなくして、仲よくしましょう、というのはウソにしか聞こえない。村山談話を生かし、侵略の実態をもっと知り、政府の姿勢を転換させ、真の友好関係を築かねばならないと思う。

美味しい昼食を頂いた後、被害者が葬られている林山寺を訪ね、心を込めて折鶴を奉納した。ここにも多くの被害者名簿の記載がある。上崇山の村の入り口を訪問し、当時を想像した。村の入り口には、日本軍が侵略して被害を与えたことを記す地図と記念碑が立っている。

*731部隊

731部隊は、第二次世界大戦期の大日本帝国陸軍に存在した研究機関のひとつ。正式名称は関東軍防疫給水部本部であるが、満州第七三一部隊の秘匿名称(通称号)である略である。満州に拠点をおいて、細菌戦に使用する生物兵器の研究・開発機関でもあった。そのために人体実験や生物兵器の実戦的使用を行っていたことで有名である。

細菌戦を巡る東京地裁判決(第一審判決/2002年8月27日)

東京地方裁判所(民事18部 岩田好二裁判長)は、2002年8月27日、731部隊細菌戦国家賠償請求訴訟(原告・中国人被害者180名)において、731部隊等の旧帝国陸軍防疫給水部が、生物兵器に関する開発のための研究及び同兵器の製造を行い、中国各地で細菌兵器の実戦使用(細菌戦)を実行した事実を認定した。

すなわち、判決は、「731部隊は陸軍中央の指令に基づき、1940年の浙江省の衢州、寧波、1941年の湖



林山寺隣にある遭難同胞記念碑で慰霊黙禱し折鶴を献納。この敷地には大規模な細菌戦遭難展覧館が建設中だった。

南省の常德に、浙江省江山でコレラ菌を井戸や食物に混入させる等して細菌戦を実施した。ペスト菌の伝播(でんぱ)で被害地は8カ所に増え、細菌戦での死者数も約1万人いる」と認定した。

さらに判決は、細菌戦が第2次世界大戦前に結ばれたハーグ条約などで禁止されていたと認定した。

しかしながら、原告の請求(謝罪と賠償)に関しては全面的に棄却した。

一方判決は、法的な枠組みに従えば違法性はないとしながらも、「本件細菌戦被害者に対し我が国が何らかの補償等を検討するとなれば、我が国の国内法ないしは国内的措置によって対処することになると考えられるところ、何らかの対処をするかどうか、仮に何らかの対処をする場合にどのような内容の対処をするのかは、国会において、以上に説示したような事情等の様々な事情を前提に、高次の裁量により決すべき性格のもの」と指摘し、政府の対応を求めている。

(NPO 法人 731 部隊・細菌戦資料センターホームページより)

細菌戦を巡る最高裁判決に対する弁護団声明 (2007年5月9日)

731 部隊細菌戦被害国家賠償請求訴訟弁護団 団長 弁護士 土屋公献

- (1) 本日、731 部隊細菌戦訴訟で最高裁判所第1小法廷は、中国の細菌戦被害者180名が求めている謝罪と賠償を退ける全く不当な決定を言い渡した。私たち細菌戦裁判弁護団は、最高裁判所の上告棄却決定、上告不受理決定と同決定を下した裁判官らを満腔の怒りを込めて弾劾する。
- (2) 731 部隊や1644 部隊等の細菌戦部隊は、侵略戦争中、中国の各地で細菌戦を実行した。例えば一審判決及び控訴審判決で認定されたように日本軍は1940年浙江省の衢州・寧波に対し、又1941年湖南省の常德に対しペスト菌を使った細菌戦攻撃を実行し、ついで1942年浙江省の江山にはコレラ菌を使った細菌戦を実行した。

細菌兵器の使用は、1925年のジュネーブ条約等の国際法にも違反するもので明白な戦争犯罪で

あった。また細菌戦の残虐さは、ドイツのナチズムが犯したユダヤ人虐殺と並ぶ人類史上類例のないものであった。しかるに日本は、敗戦から62年を経た現在まで、細菌戦の事実を一度も認めていない。そればかりか逆に日本は細菌戦の事実を徹頭徹尾隠蔽してきた。このように細菌戦問題は、日本がアジア侵略と植民地主義を反省していない点で深刻であり、また同時に現在の日本の戦争政策に直結している点で重大なのである。

- (3) 日本政府のこのような極めて悪質な姿勢は、中国の細菌戦被害者の気持ちを踏みにじり続けてきた。原告らは、日本政府への怒りを込め人間の尊厳の回復をかけて、日本の国家責任を追及するため提訴した。原告らは、日本が細菌戦の事実を認め率先して謝罪と賠償を履行することが日中友好の実現に寄与すると信じ、裁判準備段階をふくめ12年間裁判闘争を闘ってきた。

一審、二審の裁判所は、細菌戦による原告らの



上崇山村の当時の集落図と被害者の記録をみて説明する基金の王鑫岳さん。

被害事実と日本の国家責任を認定したにもかかわらず、国家無答責の法理等を採用して、原告の請求を棄却した。

原告は、国家無答責の法理の採用が、憲法13条、17条に違反し破棄されなければならないこと等を理由として上告した。今回の最高裁決定は、一審、二審の判決を容認したものでまったく不当な決定である。

最高裁判所は、本年4月27日の西松建設強制連行強制労働裁判、及び従軍慰安婦裁判において、「日中戦争の遂行中に生じた中華人民共和国の国民の日本国又はその国民若しくは法人に対する請求権は、日中共同声明5項によって裁判上訴求する権能を失ったというべきである」という不当な理由で原告敗訴判決を下したが、これに続く中国人被害者に対する不当な決定である。

- (4) 私たち細菌戦裁判弁護団は、細菌戦裁判の原告団・支援団と共に、日本政府が細菌戦の事実を認めて細菌戦被害者に謝罪し賠償するまで、闘いを強力に継続する決意である。以上

連絡先 団長 土屋公献(土屋総合法律事務所)
弁護団事務局 (一瀬法律事務所)

南京大虐殺記念館及び惨案跡を視察して

凄惨な出来事が 81 年前に確かにあった

有田 純也



第四次の団は献花し祈って誓った（2018年5月12日）

5月12日午前、杭州から高速鉄道で南京へ向かった。高速鉄道の入場の際に荷物検査があり空港並みのセキュリティーチェックだった。駅も空港並みの大きさで、時刻表の電光掲示板も空港と同じだった。高速鉄道はまるで飛行機の移動のようで、杭州から南京の1時間半の道のりはあっという間だった。

午後から南京虐殺記念館を見学した。記念館の入り口にある、亡くなった子どもを抱えながら空を見上げる女性のモニュメント像が印象的だった。たくさん中国人が途切れることなく入場していたが、欧米からの訪問者が少ないように感じた。日中関係の悪化にともない日本人の訪問者も少なくなっていると聞く。

冒頭、献花を行ったが、行きかう中国人の視線を感じた。年々訪れる日本人は減少しているかもしれないが、南京で日本軍の行った筆舌に尽くしがたい残虐な行為にしっかり目を向ける日本人がいることを中国の方に少しでも知ってほしいと願いながら黙祷した。

南京大虐殺遇難同胞記念館の見学時間は2時間弱で、少し駆け足で見て回った。記念館に「300000」という石碑があるが、現地のガイドから、最近の調査で虐殺された人は30万人を超えると聞いた。南京を訪れ現地で話を聞くと、その数字は決して誇張でないと分かる。

私は現在39歳で、ロスジェネ世代にあたる。1999年の大学入学時、中学や高校の歴史で南京事件を習ったこと自体の記憶はなかったが、小林よしのりの『戦争論』は鮮明に記憶していた。『戦争論』が出版されたのが98年で、当時2ちゃんねると呼ばれるイ

ンターネット掲示板が一部の若者で流行したと同時に小林よしのりの戦争論の思想が若者に浸透していった。ウィンドウズ98、2ちゃんねるの電子ツールに呼応するように、ネット右翼が形成されていった。『戦争論』は90万部売れたので、相当数の若者が読んだはずである。95年、小林よしの

りはオウム真理教と対峙し、命をかけて闘う言論人というイメージがあった。私が小学生のときに『おぼっちゃまくん』という漫画が流行り、そして高校生になってから延長線で『ゴーマニズム宣言』を読むようになった。当時、南京大虐殺は何となく疑わしいという印象だけが残った。99年大学に入り、多角的に学習するようになって、『戦争論』の違和感を言語化して否定できるようになった。大学で平和学や北東アジア、近代の歴史を学ぶことがなければ、自分もしかしてネット右翼になっていたかもしれない。そのくらい、『戦争論』は影響があったと思う。『戦争論』の南京大虐殺についての部分を再度読み返したが、今の日本人が抱く印象を形作ったように



子どもの骸を抱えて阿鼻叫喚の親。記念館入口で

思う。南京大虐殺や「慰安婦」問題は、中国や韓国がでっちあげて、日本に言いがかりをつけているような印象操作に『戦争論』は導いている。7月5日の読売新聞と韓国日報の調査で、韓国側は元「慰安婦」への再度の謝罪の必要があるに91%、日本側は14%となっている。今、南京大虐殺についてどう思うかを調査したらどのような結果が出るの

遇難者 300000

遭難者	300,000
조난자	30만
Жертвы	300 тысяч
Vítimas	trezentos mil
Vittime	trecento mila
Θύματα	τριακόσιες χιλιάδες
Victimas	trescientos miles
Victimes	trois cents mille
Opfer	drei hundert tausend
Victims	three hundred thousand

る会」の運動は頓挫したが、日本人の歴史認識を歪めるという意味では成功したかもしれない。そして今、育鵬社が地道に教科書の拡張を図っている。気付いたら、将来日本人の多くが歪んだ歴史観を持つようになるかもしれない。南京大虐殺や従軍「慰安婦」を国際社会の場で否定するような発言をすれば、大恥をかくことは免れない。そうした歪んだ歴史認識を当たり前と思う若者が世界に出たときに恥をかくことは必至だ。国際化教育に力を入れる安倍首相は、世界で恥をかく若者を量産したいのだろうか。恥をかくだけならまだいい。日本が孤立するような道を国民自らが選ぶようになるかもしれない。

『戦争論』の次に『嫌韓論』が出版され、その両書は今でもネット右翼のソースになっている。ネット右翼は20代の若者より、30代から50代が多いという統計があるが、2ちゃんねると『戦争論』で育った世代が背景にあるのではないだろうか。また、自民党が野党時代に立ち上げた「自民党ネットサポーターズクラブ (J-NSC)」というボランティア団体に約1万9000人が登録しており、ネット上で中国、朝鮮、韓国に対して憎悪の言葉をまき散らしている。そうしたサポーターが、南京大虐殺がなかったという妄言をネットで拡散している。「便所の落書き」と思われたインターネットの書き込みが、現実世界に影響を及ぼしている。

記念館の序文で事件の概要が簡潔に紹介されている。「19世紀の後半から、日本は一步一步と帝国主義の道を行き、何度も対中侵略を發動し、戦争中数えきれない犯行を実施した。1931年に、日本は意図的に九・一九事変を起こし、局部的な対中侵略を發動した。1937年7月7日に、日本は横暴にも全面的な対中戦争を發動した。同年12月13日に南京に野蛮に侵入した日本軍は、公然と国際法に違反し、虐殺・強姦・強奪・放火を恣意的にし、国内外を驚かす南京大虐殺事件を起こした。南京の三分の一の建物は毀され、大量の財物は略奪され、数えきれない女性は蹂躪・殺害され、数えきれない子どもは非命に死なれた。戦後、日本人戦犯裁判の中国軍事法廷の判決によると、犠牲者の総人数は30万人以上にも達している。

南京大虐殺は、侵華日本軍が犯した数え切れない

うか。もしかして似たような結果になるかもしれない。『戦争論』とあわせ当時論争を呼んだ「新しい歴史教科書をつく

暴行事件の中でも最も典型的な一例として、世間の耳目を驚かす非人間的な犯罪行為であり、人類史上の暗黒な一頁である。本展示の主旨は、南京大虐殺という痛ましい史実を銘記し、無辜の犠牲者を追悼するとともに、平和に発展する道を断固として歩んでいきたいという中国人民の崇高な願望を表明し、歴史を銘記し、過去を忘れず、平和を心から愛し、未来を引き開いていこう、という中国人の確固とした立場を宣言する、ということにある」(原文ママ)。

記念館には外国人の証言として、ジョン・ラーベ、ジョン・マギーなど複数の資料が展示されていた。とりわけミニ・ヴォートリンについては、月刊世界5月号で北原みのりが「闇を言葉にする 南京への旅から」で寄稿していたので、じっくりと見学した。ヴォートリンは金陵女子文理学院教授で、宣教師として来た。人生のほぼ全てを中国の女子教育と福祉に捧げた。ヴォートリンはアメリカ大使館から退避勧告が来ても最後まで南京に残り、強姦、暴行を防ぐために献身的な活動を続けた。ヴォートリンは懸命に中国人女性を守ったが、日本軍から金陵学院で引き取った1万人の女性から100人を差し出すよう要求された。日本軍はこれ以上の強姦を防ぐため兵士のための正規の慰安所をつくるとした。100人を差し出せば後はむやみに連行しないという日本軍に、ヴォートリンは女性を物色させることを認め、21人が連行された。1940年、ヴォートリンはアメリカに帰国し、1941年自らの命を絶った。

南京大虐殺は当時日本では報道されなかった。記念館では日本の新聞が展示されていたが、日本軍兵士と子どもが手をつないだ平和な写真だった。破壊された建物の写真は不許可になっていた。当時日本人は大虐殺の事実を知らず、戦後になって多くの国民が知ることになった。しかし、戦後、日本人が南京大虐殺に向き合ってきたのだろうか。先日、「ゲッベルスと私」という映画を観た。主人公はナチスの宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッベルスの秘書として1942



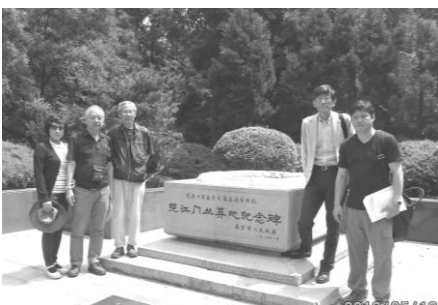
年から3年間働いたポムゼル。2014年、69年間の沈黙を破り、当時103歳のポムゼルは30時間に及ぶインタビューに応じた。ポムゼルはホロコーストの事

実を当時知らず、「何も知らなかった私に罪はない」と答えた。何も知らなかった私は何も悪くない。戦後の多くの日本人の態度ではないだろうか。自分の祖父母の世代が行ったことに自分は向き合えばいいか、考えさせられた。自分はポムゼルや祖父母を責めることはできるのだろうか。ポムゼルは、当時はナチスに逆らい、抵抗して死んだ人を無駄死にと捉えていた。仮に戦争中に自分が生まれていたとしたら抵抗できたのだろうか。自分もポムゼルと同じく長いものにまかれ、戦後「自分に何も罪はない」と答えるかもしれない。ポムゼルはより良い賃金と生活を求め、ナチス宣伝省に入った。そのために努力もしたかもしれない。1930年代に自分が生きていたら、自分も同じだったかもしれない。より良い生活と身分の安定を求め、進んで軍部に協力したかもしれない。しかし、ポムゼルは本当に罪悪感が全くなかったのだろうか。罪悪感とは言わないまでもどこか後ろめたさはあったのではないだろうか。

日本軍は南京で大虐殺をなぜ行ったのか。帰国後、笠原一九司著の『南京事件』（岩波新書）を読んで再度学習した。そこで分かったことは、部隊は予備兵が多く士気が低かった、第2次上海事変後の無理な進軍でストレスがさらに高まった、憲兵、法務部が皆無だった、兵站の脆弱性故の現地調達という名の略奪、そして強姦、中国人への蔑視、補給がないため捕虜にまで食料が行き渡らなかった、包圍殲滅戦の命令。こうした条件が重なり、南京で大虐殺が起きたというプロセスは理解できた。虐殺に至るプロセスは理解できても、それでもなぜ大虐殺を行



22 か所あると言われる虐殺惨案跡気記念碑うち、長江沿いの中山埠頭記念碑（上）と挹江門記念碑で慰霊する。



い得たかを自分は理解できたのだろうか。明治近代の問題点、天皇制ファシズム、もっと言えば日本の思想まで辿らないとならないかもしれない。虐殺に至った原因を反省しなければ、悲劇は再び起きる。

長江の下関の中山埠頭

頭の記念碑、長江沿いの上元門にある草鞋峡の記念碑、繡球公園にある挹江門の記念碑を訪れた。南京各所に13の記念碑がある

と聞いた。記念碑をめぐる中で、なぜ死体の山ができるのかを聞いた。一斉に機関銃を浴びせられ人が倒れる。先に機関銃や小銃に打たれた死体を越えて逃げようとする人。そこにまた銃弾が浴びせられる。それが繰り返され自然に3メートル位の死体の山ができると聞いた。一定程度の高さになると山は崩れ、現場は、あちこちで死体の山が崩れる音が聞こえたという。そこでかろうじて生き残っても、残らず銃剣でさされ殺された。武器を捨て、闘う意思のない中国人捕虜や一般市民を日本軍は一方向的に機関銃で虐殺した。



幕府山崖下の挹江門記念碑を訪ねる。

中山埠頭の記念碑から少し離れ長江を一望した。対岸まで1.5キロ。81年前、血や死体の山で溢れた中山埠頭は、今ではイルカが見える観光地になっている。繡球公園では日曜の午後、中国将棋を楽しんでいる5、6人のグループを見かけた。南京は歴史にゆかりのある文化的な建造物に囲まれ、情緒あふれる平和な街だが、凄惨な出来事が81年前に確かにあった。東京大空襲や各地の空襲、広島、長崎の原爆投下、敗戦記念については毎年日本各地でイベントが開催される。しかし、日中戦争について振り返るイベントはほとんど開催されない。日中戦争や南京大虐殺について、意図的に記憶を消去しようとしているのか、それとも無意識に忘れようとしているのか。安倍首相は戦後70年の談話で「日本では、戦後生まれの世代が、今や、人口の8割を超えています。あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」と述べている。南京大虐殺から81年は、遙か昔の過去のことなのだろうか。南京大虐殺の実相を知るならば、「謝罪を続ける宿命を背負わせてはならない」と、どの口が言えようか。自分にとっては祖父母の世代が行った行為は、遙か昔の出来事ではない。シベリアで拘留された祖父、中国に行った祖父から戦争の体験をほぼ聞かないまま、両祖父はもう亡くなった。日中戦争は今でも多くの日本人が関係している出来事だ。原爆投下や東京大空襲など、戦争の被害ばかりを強調する日本のメディアだが、日本はアジアにとって最大の加害者であったという視点は抜け落ちている。

日中の真の友好は、経済だけで築けない。日本は過去の行為を認め、誠実に行動するしかない。

（新潟県平和運動センター事務局長）

実施概要

【5月9日（水）】

成田→（北京）→重慶

重慶泊

11:00 成田空港第一ターミナル南ウイング集合
CA（中国国際航空）上海便が遅延のため上海乗り継ぎが無理と判断し北京経由で重慶へ。
重慶空港着が24:25。
着後、専用車でホテルへ（重慶国航飯店）

【5月10日（木）】

重慶→杭州→義烏

義烏泊



三峡博物館のなかに重慶爆撃事件コーナーがある

朝食後、交流会が午後になったので、博物館見学をした。

□三峡博物館のなかに重慶爆撃事件コーナーがある。
また、パノラマ映像施設で爆撃当時の模様を見る。映像は見るべきものがない。最近、アメリカのジャーナリストから取り寄せた映像が生々しいが使用さ



重慶爆撃事件コーナー入口にあるモニュメント

れていなかった。

□当・博物館ではマルクス生誕200年記念としてマルクス・エンゲルス展が開催されていた。
ちなみに、今年、マルクス出身地ドイツ・トリーア市に中国から銅像が寄贈された。
□重慶は山間の要塞のようだ。三峡下りの出発点でもある。食事はさすがに四川料理の本場、できるだけ辛いものを注文したがそれでも十分に辛い。
昼食後、中国民間対日索賠償連合会重慶分会の会議室で意見交換。

■重慶無差別爆撃関係視察、聴取

- ・ 幸存者（粟遠奎さん）の話
- ・ 西南大学：楊宇翔先生



三峡博物館ではマルクス生誕200年展示が開催されていた

・ 対日賠償原告団：侯岩琳 秘書長
□惨案跡視察（重慶爆撃遺跡博物館・大轟炸惨案遺跡に折り鶴献納。万人坑跡「黒石子村」は場所が再開発地で遠方確認しかできず）

その後、空路、杭州へ。空港は最近、国内便でも顔認証が必要となり時間がかかる。杭州着後、義烏へ移動。この日もホテル着は午前様だ。



四川の激辛料理に出会う

（義烏宸名国際酒店）

【5月11日（金）】

義烏→杭州

杭州泊

朝食後、バスで義烏市内へ。資料館の館長がホテルまで出迎えてくれる。



義烏・細菌戦展覧館で手作り餃子を頂く

資料館で

■細菌戦被害者及び関係者との出会い

- ・ 資料館で折り鶴献納
- ・ 証言者2人（王化涛さん、王基旭さん）から話を聞く
- ・ この資料館で折り鶴献納。

□資料館では大量の水餃子の接待を受ける。

その後

■細菌戦実施地区視察

- ・ 林山寺にある慰霊碑折鶴献納。
- ・ 上崇村惨案跡記念碑を訪ねる。

昼食を資料館館長らと取り、終了後、杭州市へ



杭州の千人抗跡入口のモニュメント。奥にある石碑には一文字「奠」とある

■途中、杭州の“千人抗”跡視察（細菌戦関連ではない。三光作戦被害者と同じもの）。

中国の歴史に良く登場する西湖を左に市内へ。久しぶりに早く 18:40 にホテルチェックイン。ホテル付設のレストランで夕食。

【5月12日（土）】

杭州→南京

南京泊

08:00 ホテル発で杭州東駅へ。

□国内鉄道でも身分証明書（外国人は旅券）チェック、荷物チェックが厳しい。



杭州東駅の威容に目を見張る

杭州東駅から、高速鉄道で南京へ移動（1h30）

11:10 ごろ南京着

□杭州から南京は上海経由かと思っていたが、上海は通らなかった。そこで思い出す。もともと上海は寒村で清末に外国人によって発展した街である。杭州が中国中部の政治、文化の中心であり、京杭大運河の起点は杭州だった。



ホテル近くの莫愁湖公園には孫文が揮毫した「建國成仁」の碑があった

着後、漢定門外のレストランで早めの昼食。

■南京大虐殺記念館で献花（200 元）、館内見学。1 時

間は初めての人にとっては短い。中の展示が変更され“遺骨展示”があり、資料コーナーはなくなっていた。

- ・館内視察で折り鶴献納
- ・慰霊火に黙祷
- ・慰霊の塔の側の木々の間には「平和友好祭の記念碑」が残されていた。記念館改築の際、資金寄付した際に建立されたもの。

その後、

■惨案跡視察（2 2 箇所中、中山埠頭で慰霊と折鶴献納）

□長江大橋及び建設記念館は修復中で、川沿いから見学。長江に面する当時の渡川用の列車駅跡には記念列車も保存され整備されていた。車窓から、南京総統府跡見学し、ホテルへ

18:00 チェックインし早めの夕食

□宿泊した南京の南西部に位置する南京金陵大廈は南京大虐殺記念館も近い、莫愁湖の近だった。この莫愁湖公園には孫文が揮毫した「建国成仁」の碑もあり歴史を垣間見た。

【5月13日（日）】

南京→上海

上海泊

09:00 市内見学

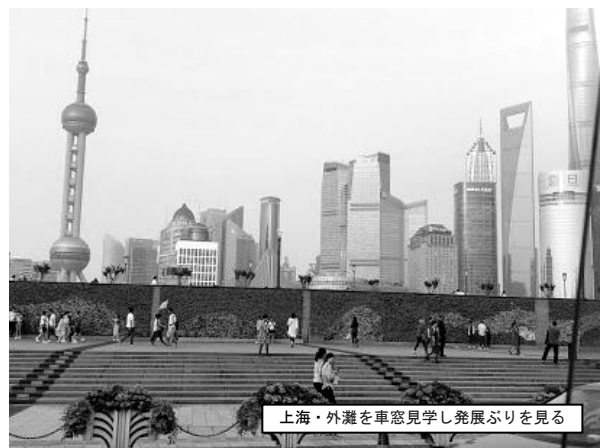
■南京視察続き（草鞋峡、挹江門などの跡地を視察）

早目の昼食を取り、専用車で上海空港へ。

□途中途中休憩入れて5時間で上海・外灘に着く。車窓観光し上海浦東空港へ。荷物をもって空港ホテルへ移動。

19:00 チェックイン。ホテル付設レストランで最後の夕食はビュッフェ。

最後の夜の団交流を部屋で行う。所用のため深夜便で先に帰国する鈴井団長が離団し空港へ。



上海・外灘を車窓見学し発展ぶりを見る

【5月14日（月）】

上海→成田

早い朝食を取り、07:00 ホテルから空港へ徒歩で移動。5～6分くらい。出国手続きもスムーズでガイドの劉さんとお別れ。

復路は予定通りのスケジュール。空路、成田空港へ。

記：鎌田 篤則



上：義烏市崇山村の被害者が葬られている林山寺
 右：義烏市の侵華日軍細菌戦義烏展覧館で被害者たちに折鶴を献納。

訪問	被害地点	序号	被害者姓名	性別	被害時間	被害地点	被害者姓名	性別	被害時間
10月	楊村多里村	1120	王顯英	66女	1942年11月	楊村多里村	1120	王顯英	66女
10月	楊村多里村	1121	陳四娘	23女	1942年11月	楊村多里村	1121	陳四娘	23女
10月	楊村多里村	1122	李瑞英	3女	1942年11月	楊村多里村	1122	李瑞英	3女
10月	楊村多里村	1123	王海英	29女	1942年11月	楊村多里村	1123	王海英	29女
10月	楊村多里村	1124	丁小兰	32女	1942年11月	楊村多里村	1124	丁小兰	32女
10月	楊村多里村	1125	李冷凤	66女	1942年11月	楊村多里村	1125	李冷凤	66女
10月	楊村多里村	1126	王小妹	53女	1942年11月	楊村多里村	1126	王小妹	53女
10月	楊村多里村	1127	楊銀鳳	26女	1942年11月	楊村多里村	1127	楊銀鳳	26女
10月	楊村多里村	1128	黃雲兰	7女	1942年11月	楊村多里村	1128	黃雲兰	7女
10月	楊村多里村	1129	黃正輝	3男	1942年11月	楊村多里村	1129	黃正輝	3男
10月	楊村多里村	1130	黃四丁	13男	1942年11月	楊村多里村	1130	黃四丁	13男
10月	楊村多里村	1131	李金壽	15男	1942年11月	楊村多里村	1131	李金壽	15男
10月	楊村多里村	1132	李金	3男	1941年12月	楊村多里村	1132	李金	3男
10月	楊村多里村	1133	李二喜	8女	1941年12月	楊村多里村	1133	李二喜	8女
10月	楊村多里村	1134	羅小蘭	4女	1941年12月	楊村多里村	1134	羅小蘭	4女
10月	楊村多里村	1135	陳紅妹	28女	1941年12月	楊村多里村	1135	陳紅妹	28女
10月	楊村多里村	1136	陳慶英	31男	1941年12月	楊村多里村	1136	陳慶英	31男
10月	楊村多里村	1137	陳友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1137	陳友妹	49女
10月	楊村多里村	1138	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1138	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1139	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1139	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1140	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1140	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1141	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1141	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1142	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1142	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1143	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1143	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1144	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1144	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1145	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1145	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1146	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1146	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1147	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1147	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1148	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1148	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1149	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1149	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1150	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1150	謝友妹	49女
10月	楊村多里村	1151	謝友妹	49女	1941年12月	楊村多里村	1151	謝友妹	49女

【編纂記】
 戦後70年を期して、あらためて「過去の事実と向き合う」作業をはじめ、2015年の第一回目は「村山談話を継承し2015年を日中友好年とする訪問団」として開始した。2016年もなんとか2回目を実施してきた。2017年は関係者との協議の下「第三次・村山談話を継承する平和の旅」とし取り組み731細菌部隊跡（ハルビン）、平頂山事件跡（撫順）、9・8事件跡（瀋陽）、蘆溝橋事件跡（北京）に足を運んだ。
 第四次は重慶、義烏、南京を訪問した。各報告が触れているように今なお新たな発見、あらたな思い、あらたな経験を与えられ、そして個人的にはあらたな出会いを頂いた「旅」だったように思われる。出会いとは「今なお事実を背負い、風化を拒否する中国の民」たちであった。
 鎌田篤則（IFCC 理事長）

報告書
 第三次
 村山談話を継承する平和の旅
 編纂：訪問団事務局
 発行：IFCC 出版会
 〒162-0801
 東京都新宿区山吹町
 333 辻ビル405
 TEL03-3268-4387
 FAX03-3268-6079
 頒価：350円（送料込）